

保育における「共同」の可能性—アトム共同保育所を手がかりにして—

高橋 沙 希

はじめに

本研究は、大阪府泉南郡熊取町にあるアトム共同保育所（2003年からアトム共同保育園に改称）に関わる大人の手記を手がかりにして、保育における「共同」の可能性を検討しようとするものである。

アトム共同保育所は、1967年に京都大学原子炉実験所（アトム共同保育所と同様に熊取町にあり、2018年4月に京都大学複合原子力科学研究所に改称）で働く職員によってつくられたことを発端として始まった。当初、町立の保育所では、3歳以降の保育のみを担当していたため、アトム共同保育所では、3歳未満を対象としていた。その後、1979年には町立保育所が2歳児の保育を始めたため、アトム共同保育所は0、1歳児の保育に変更した。しかし、地域状況の変化により、1989年には2歳児の保育を復活させ、1993年には3歳児保育、20時30分までの夜間保育を、1994年には4、5歳児保育をそれぞれ開始した。2003年には、社会福祉法人アトム共同福祉会が設立され、認可保育園としてアトム共同保育園（本論文における保育園の名称は、以上の区分をもとに記述している）となった¹⁾。

アトム共同保育園がある熊取町は、かつては農業とタオルをはじめとした繊維産業が盛んな町であったが、京都大学原子炉実験所の設立や関西国際空港の新設により、1970年代よりベッドタウンとして発展してきた。ただし、以前より女性の労働文化があったため、町立保育所が整備されてきた地域であった。そのため、町ぐるみで保育行政に力を入れており、後に触れる「子育てと保育を考える集い」には、熊取町長をはじめとした自治体職員が参加し、保育行政を中心とした街づくりが行われてきた。

アトム共同保育園のように「共同保育」という運営方法を起点に発展してきた保育所は全国的に存在している。そうした保育所のほとんどにおいて、「共同保育」というのは、子どもの保護者と保育者がと

もに保育所の運営を行うという形式的な意味のみをもつ。しかし、アトム共同保育所における「共同」は、必ずしも形式的な意味ではない。所長を長く務めた山本健慈²⁾は、「共同保育所は、『子育て』という使命（ミッション）を実現するための共同体」であり³⁾、「保育者・職員と親、職員同士、親同士の『助け合い』」であるという⁴⁾。アトム共同保育所における「助け合い」の「共同」は、いかにして出来上がったのだろうか。そこでいわれている「共同」は、具体的にどのような営みだったのだろうか。また、「共同」がもつ可能性とは何であるのだろうか。その一端を明らかにするのが本稿の課題である。

ただし、「共同保育」を形式的な共同ではないかたちで捉えようとする研究は、すでに提示されている。例えば、「障害児」とされる子どもの保育に関心を寄せている曾和信一は、共同保育について次のように述べている。すなわち、共同保育は、統合保育を乗り越えるために提起された考え方である。統合保育というのは、「障害児」と「健常児」を分離させた保育に対する批判から1970年代より生まれた考え方であるが、そこでいう「障害児」は、「健常児」に適應でき、その集団に参加が可能な子どもに限定されていた。そうした一部の「障害児」の包摂と排除を乗り越えるために提起されたのが「共同保育」である。しかし、曾和は、共同保育という考え方も、「障害児」の発達を保障するために「障害児」と「健常児」が共同するという単なる手だてとして理解されてしまうことを指摘している⁵⁾。曾和によると、「共同保育」は、手だてとしての共同ではなく、「本来的には社会共同の営みとしての保育に根ざしたもの」という理解が適切であり、「そこでいう共同とは、『障害児』と『健常児』が相互的で、その立場が同じ地平にたって対等的であり、そのようなかわりそのものを深め合っていくことを志向したもの」である⁶⁾。曾和は、「障害児」とされる子どもの保育に関心を寄せているので、「障害児」と「健

常児」という二項で「共同保育」を述べているが、「共同保育」が元来、人間同士の関係性に基づく「共同」であるとするならば、そこでいわれている「共同」は、「障害児」とされる子どもだけでなく、すべての子どもに関わるだろう。ちなみに、曾和は、人間同士の関係性に基づく「共同」を含んだ保育を「共生保育」と呼んでいる⁷⁾。

さらに、曾和とともに「共生保育」を検討している堀智晴は、保育者と子どもに関して次のような重要な示唆を提示している。堀は、保育の前提として保育者のことを「子どもと同じように自分の生育史、自分史というべきもの」と理解し、「保育者の身のこなし方、目のつけ方、などをはじめとする行動様式は保育者が生きてきた過程で身につけてきたもの」である存在だと位置づけている⁸⁾。加えて、「共生保育」をするということは、「保育者も子どももそれぞれに自分の過去を背負っていまここに在ると同時に、「保育者と子どもがそれぞれにこれからどう生きていくかという未来を志向」することが重なった瞬間の共有であるという⁹⁾。こうしたことから、保育者には「保育実践を通して自己を変革しさらに新たな実践を創造する」ことが求められるのである¹⁰⁾。つまり、保育者のこれまでの人生や経験は、子どもをみとる上で大切な要素であり、それは同時に、自分と子どもの未来を描く上で必要な要素でもある。したがって、保育者自身が自己を変革して成長していくことは、子どもの現在と未来につながっていくのである。

以上の指摘をふまえて、改めてアトム共同保育所を捉え直してみると、次のような特徴を指摘することができるだろう。すなわち、アトム共同保育所では、「共同」を「保育者・職員と親、職員同士、親同士の『助け合い』」として定義しており、大人同士の関係性に焦点が当たっている点である。これは、アトム共同保育所を取材したジャーナリストの斎藤茂男が、アトム共同保育所を「人生学校」と称したように、アトム共同保育所では、大人も成長する主体として捉えられていた。子どもを預ける親やアトム共同保育所で働く保育者たちも、そこでの出会いや人間関係、経験を通して、自らも成長し、変化する主体としてアトム共同保育所に関わっているのである。こうした大人の成長を、市原が「若い保母、そして親、それぞれにこれまでの育ちで積み残した部分を、アトムで積み直している」と表現している

ように¹¹⁾、アトム共同保育所における成長する主体としての大人のあり方は、「共同保育」を考えたときに、一つの重要な側面として浮かび上がってくる。そこで、本稿は、アトム共同保育所を対象とした研究の手始めとして、大人の手記を手がかりにしてアトム共同保育所における「共同」に迫ってみたい。

第1節 アトム共同保育園の礎—市原悟子の経験

すでに指摘したように、アトム共同保育所における「共同」は、「助け合い」をもとにしている。しかしながら、これは、「アトムに集う人が道徳的にすぐれた『助け合い的人格』であるから実現した」のではなく、「日常の子育て・保育と運営をめぐる葛藤、対立、トラブルを経て創り出された」という¹²⁾。まず、本節では、長きにわたり所長代理を務めた市原悟子の経験から、アトム共同保育所がいかなる葛藤や対立、トラブルを経験へて、「共同」へたどり着いたのか、その基礎となる出来事を振り返ってみたい。

(1) アトム共同保育所との出会い

市原は、「第17回くまとり子育てと保育を考える集い」のまとめとして発刊された『透明はイヤ』（1997年）の「第四部 アトムマインドの形成と実践」に、自身の保母³⁾としての経験とアトム共同保育所における実践を記している¹⁴⁾。市原は、1978年からアトム共同保育園で働いているが、アトムに関わるきっかけは、保育所の運営委員の父親たちより、保育園で働いてほしいと直接依頼されたことであった。その際に、運営委員の父親たちは、アトムの実情を次のように話していた。

共同保育所っていうのは、そのころ町からの補助金、そんなにももらってなかったから、父母からの保育料で保母の賃金を賄っていたんですね。そういうところに勤めてくれる保母というのは労働条件もよくないし、賃金も低い、法律と全然違う待遇でもいって、人の好人っていうか、そういう人たちが働いている。（中略）ですから些細なことで人間関係がうまくいかなかったら、「もうじゃあ、やめます」

ということで、ひっきりなしに職員がやめていく。ひどい人は2日だけで3日目からパタッと来なくなったとか。1ヵ月、3ヵ月、1年続いた人は一人もいないという状況。¹⁵⁾

当時、市原は、結婚をきっかけに京都大学の保育所を退職し、パート勤務を転々としていたこともあり、正規職員として働かせてもらえるなら、とアトム共同保育所へ就職を決めた。ただし、市原とアトム共同保育所の出会いは、この時が初めてではなかった。市原は、京都大学の保育所を退職した後、一度アトム共同保育所へ就職希望で履歴書を持参し、アトム共同保育所を訪れていた。その際のアトム共同保育所の印象は決して良いものではなかった。

アトム共同保育所の保母は、市原を含めて5名(20代2名、30代2名、40代1名)だった。市原が就職して、まず感じたのは、保育の質の低さだった。一日の保育の様子を知らせる日報は、「今日散歩しました」「部屋であそびました」のように一行しか書かれておらず、保育内容を職員同士が話したり、保護者と話したりすることもほとんどなかった。市原は、20代のもう一人の保母と30代のパート勤務の保母と結託して、職員会議を立ち上げた。現状をどうにかしたいと30代のパート保母に打ち明けたところ、次のように打ち明けられたという。

彼女は「私も自分の子ども、こんなところに預けたくないと思ってた。保育所の子どもってかわいそうやなって思ってたんや」って…。私ブチンと切れて「パートであってもあなたはここで働いている人やんか。働いている人が自分の子どもを預けたくないという感じのことををよう今までだまってたな」って私はその先生にくっついてかかったんです。後日、その先生から「えらいあなたは怒ってたな。でもあれがスタートやったな」ってきいたんですけれどね。¹⁶⁾

「こんなところに預けたくない」と思うほどの、アトム共同保育所の現状はいかなるものだったのだろう。何人もの保母が「やめたい」と去っていき、1年続いた人がいない。そこで働いている保母ですら、子どもを「かわいそう」と思ってしまう。そのような状況を変えるために、市原は、職員会議で

他の保母たちに次のように訴えた。

それまで保育が何かとか、子どもの発達がどうのとかいうようなこと、一切会議の中で話題にできないような状況だったけれども、保母はお母さんには絶対代われない、なれない、でも保母しかできないようなことってあると思うんです。それはお母さんとは違う目で、子どものことをしっかり捉えるということができて、保母として一定の役割が果たせるんじゃないか、でも私らはあまりにも子どもの発達のことも知らないし、いっぱい知らないことがあるんじゃないか。私は職員会議でそういう話がしたい。そのために頑張るんやったらいっぱい頑張りたいということをやった。¹⁷⁾

市原の訴えは、他の保母の同意を得て、職員会議をもちながら保母の学習会に参加することになった。しかし、次に見るように、学習会への参加は、市原が考えていた方向へアトム共同保育所を導いてはくれなかったようである。

(2) 仕事と研修で疲弊していく保母たち

5名しかいない保母で計10時間の時差勤務をこなし、早番の勤務が終わり次第、往復2時間かけて大阪市内まで学習会へ行くという生活は、保母たちの身体を疲弊させていった。体力的な疲弊は、市原の訴えを受け入れた他の保母たちも感じていた。ついには、市原がアトム共同保育所へ入ってきたから大変になったという愚痴が保護者に伝わってしまい、「研修に行くのをやめてほしい」と言われてしまった。保育の質を高めるための学習会の参加であったにもかかわらず、それに参加するから大変になるという悪循環の中で、市原は、矛盾を感じ始めていた。

そんな話が保護者に伝わるものですから、懇談会の中で保護者から「もう研修行くのをやめてほしい」「市原先生の顔も疲れてる。くまを2重も3重もつくって保育はしてほしくない。我が子にはにこやかな顔をして接してほしい」とぼ〜んと言われて、アチャ、と思っけてあげたんですよね。また研修に行けば研修先の講演される先生とかは、保母はプロだからしんどくて

もにこやかに元気でハツラツというようなことを言うんですよ。それを聞きながら、「実態わかってへんなこの人」と思いながらまたムカムカしてたんです。でもよく考えたら子どもの前にそういう疲れはてた顔はよくないと、確かにそうやなあーと思って、私がやってきたこと、まちがってたんかな、とめげてきたんです。その時はじめて私の限界かな、やめたいなと思いました。¹⁸⁾

市原は、「何もない」保育所だったからこそ、研修へ行つて自らの保母としてのスキルを高め、専門性をつけようとしていた。それを通して、日々の保育に少しでも変化をもたらそうとしていた。それは、専門的な職種である保母だからこそその考え方であり、他の保母たちも異論はなかったのだろう。しかし、「実態わかってへんなこの人」という言葉からもわかるように、市原たちが私生活を犠牲にしてまで参加していた学習会では、彼女らにとって役立つ内容がほとんどなかったことがうかがえる。仕事と学習会、私生活をこなしていく中で、溜まっていった身体的な疲弊は、精神的な疲弊も招いたのだろう。市原は、一度だけ、同僚である30代のパート保母に「やめたい」と打ち明けた。

実は、30代のパート保母は、市原がアトム共同保育所へ就職する前に、履歴書を持参した際に、一度会っていた人物である。初めて30代のパート保母に会った際に、彼女が白いワンピースにネックレスをつけて保育を行っていたことに衝撃を受けたという。そんな出会い方をしていた30代のパート保母に「やめたい」気持ちを打ち明けたところ、次のように元気づけられた。

かわりの人がいない中でみんなが右往左往してのを目の当たりにしてこういうやめ方をしたらだめだなあ、次の人がちゃんと入るっていうことになってから自分がやめようと決心した時に、あんたが入ってきた。であんたは「こういうのは保育所じゃないって私にくってかかって。これから保育所つくるんや。力貸せ」って言った。今までちょっと整理されてきて、そのかいもあって子どもがどんどん増えていってるやないか。そこであんたがやめたらもとにきつと戻るで。いっぺんに戻ると思うわ。まああん

たの気性で見てられるか、と。¹⁹⁾

仕事と学習会、私生活をこなして専門性を高めてきたにも関わらず、疲れ果てた顔で子どもに向き合い、「私がやってきたこと、まちがってたんかな」とまで思っていた。市原の中には、自らがやってきたことがアトム共同保育所のためになっているという自信がなかったのだろう。しかし、30代の保母は、市原の取り組みに対して「今までちょっと整理されてきて、そのかいもあって子どもがどんどん増えていってるやないか。」と認めてくれたのである。しかも、自らが「やめよう」と思っていたところに、市原が入ってきて、結果として巻き込まれて一緒になってやっていること、「子どもがかわいそう」と思っていた保育所を頑張つて変えようとしていることを打ち明けられた。

さまざまな学習会へ出向き、保母としての専門性を高めることで、保育所を変えようとしていたが、残念ながら、学習会で市原が前向きになれることはなかった。にもかかわらず、市原が元気づけられたのは、白いワンピースの保母の言葉であった。アトム共同保育所に初めて訪れた際に、決して良いとは言えない出会い方をした保母に、市原は助けられたのである。市原は、この「激励」によってアトム共同保育所で頑張っていく決心をした。

ここまでの市原の経験がアトム共同保育所の1978年から1988年までの10年間と重なっている。市原は、この10年間で後にアトム共同保育所の核となる保母(大人)の成長に関して重要な経験をしていた。すなわち、保母も一人の大人であり、一人の人間であるということである。市原をはじめとしてアトム共同保育所の保母たちは、それぞれ異なった経緯の中で偶然、同じ保育所で勤務することになっただけの関係性である。その関係性の中心は、子どもの保育という仕事上のつながりであり、それぞれの保母が抱える背景は、「保母」という専門的な職種であるがゆえに見落とされがちである。しかし、アトム共同保育所を変えたいとあって、職員会議や学習会を提案した市原にも私生活があるように、他の保母もまた、私生活の悩みやしんどさを抱えながら、子どもの前では「保母」にならなければならない。市原自身もそのような一人の大人、人間としての弱さも含めた「保母」のあり方を模索する10年間だったといえるのではないだろうか。

さらにいえば、市原とアトム共同保育所のこの10年間の経験は、後に確認するようさまざまな背景をもった保母を受け入れ、そのような保母たちを認め彼女らの成長を後押しする土壌となったのだろう。子どものみならず、大人の成長をみとる場としての保育所が成立する礎は、市原を中心に形成されたのである。

第2節 保育者からみた「共同」

市原を中心に形成されたアトム共同保育所の土壌は、1989年の2歳児保育の復活以降、若い保母たちが多くアトム共同保育所へ入ってきたことにより、さらに活気づいていくことになった。しかし、1989年に入ってきた若い保母たちが次々と体調を崩していく中で、市原は、「彼女たちは、育ちのなかでの深い心の傷跡があることが、だんだんわかってきた」という²⁰⁾。「深い心の傷跡」とは、本節以降で触れる長谷川教子の経験にもあるように、自らの生い立ちや背景も含め、それぞれの人生の中で受けてきた大小さまざまな傷である。若い保母たちが次々と崩れていく中で、子どもの入所希望は後を絶たず、ついには、新しく採用した保母から保育が成り立たないと訴えられた。市原は、次のように答えた。

その時に私は「いったい保育って何や？」って言ったんです。「ここに電話かけてくる親ってというのは、どこへも行くところがなくて、ここであずかってもらわなければ仕事をやめなあかんって状況の人ばかりや。保育がどうということって押さえているのか知らないけれども、親の働くことをまず認めていこう。そういう子を保育していこうってことで成り立ったこの歴史がある。それを私たちはつぶしていいとは思わない。保育ってというのはその親の生活もひっくるめて守っていくことや私は思ってる。あんたがいつてる保育ってというのは、ひとりの保母がこういうことをして、何人の子どもたちにこういう体験をさせてと考えるかもしれないけど、それがなんぼのもんや」っていうふうに、その若い保母に言ったんです。²¹⁾

市原の返答は、保母の仕事について学んできた若い保母にとって「衝撃」の内容だったという。市原は、

新しいメンバーが入り、入所する子どもたちも増えている中で、再びゼロからのスタートが必要だと感じていた。

それじゃ「今までゼロとって、今までなかったもんとって自分たちでつくろう。あなたたちもその一員になっていることをよう自覚しておいてほしい。みんなであつくりたくない限り、つくりようがないんだ。いくらパーフェクトな人間がひとりいたとしても、全部のことなんてできることはない。みんなが同じようになっているのも無理だ。ひとりひとりの持ち味をひとりひとり認めあつてつくっていくしかない」ってことを職員会議の中で話したんです。²²⁾

市原の問いかけには、アトム共同保育所における職員集団の核が、第一に「できない」ことから始まっていること、第二に「できない」ことを認め合うことを通して、「自分」に何ができるのか、「持ち味」を考えることにあるということを示している。このような中でスタートしたアトム共同保育所の新しい時代では、多くの保母が一人の大人として成長していく姿がみられた。さらに言えば、保母の成長は、子どもの成長をみとる視点や保護者との関係性を深めていくことになった。そこで、第2節では、アトム共同保育所における保育者の成長として、ある職員の手記を取り上げ、その変化に迫ってみたい。本節で取り上げる職員は、アトム共同保育所が出版している『大人が育つ保育園—アトム共保は人生学校』の一節にも「考えない女から、悩める乙女への変身」としてその成長の記録が記されている長谷川教子という一人の保母である。

(1) 「駄目な人間」である自分

長谷川は、公立保育所で保母をしていた母親のもとで生まれ育った。幼いころから、母親は帰宅時間が遅かったため、家の外で母親の帰宅を待ったり、母親が勤めている保育所に電話をしたりして母親の気を引こうとしていた。そんな娘の姿を見て、母親は仕事を退職し、しばらく家庭に入るようになった。このことは、しばらく、長谷川の心に「わだかまり」を残すことになったという²³⁾。また、医学部を卒業し医者になった長谷川の兄と学業や生活態度で比較され、自分のことを「駄目な人間」だと思っ

ていた。

私はそんな時、「あ、自分は駄目な人間なんやな」って思うことしか出来なかったんですよ。それだけでなく、なんかが家の中で起ったり、なくなったり、ガラスが割れたりすると、おまえがしたに違いないっていうふうに、親にそういうふうに言われ続けてきたんですね。だから、疑われる、やってもないのに疑われることも家の中で多かったんですよ。²⁴⁾

こんな幼少時代を過ごした長谷川は、中学を卒業した後、周囲の友人が進学していく中で、流れに乗って大阪府立貝塚高校へ進学した。進学したいという気持ちはなく、目標も特になかったというが、バスケットボール部に所属し、レギュラーになるために一生懸命練習していた。部活にのめりこむ中で、長谷川の生活態度が問題となり、停学措置がとられる一歩手前まで騒ぎとなった。しかし、バスケットボール部顧問の先生が長谷川の味方になり、高校を卒業することができた。後に、長谷川は、このバスケットボール部の顧問がいたからこそ、自分は高校を辞めることなく、卒業できたと語っている²⁵⁾。高校卒業後、大阪市内で事務職として就職するが、すぐに辞めてしまい、様々なアルバイトを転々としていた時に、一度、私立保育所でアルバイトとして保母の経験をしていた。しかし、「保母の免許がないから」という理由で解雇させられ、その後、熊取町の学童保育で働いたことをきっかけにアトム共同保育所へやってきたのである。

(2) 「わからない」が言えない

アトム共同保育所で働き始めたころの長谷川は、静かに仕事をしていたという。その理由を、次のように語っている。

はじめは0歳児担当、赤ちゃんを抱っこしたこともない、ミルクの作り方、与え方も知らない、何もわからない自分がいました。いつも緊張していてオドオドしている自分。やめたいと思ったことは何度もあり、泣くのを我慢して、帰り道に泣きながら帰ったこともあります。そんな思いも誰にも言えない……孤立している自分がいました。²⁶⁾

長谷川の言葉にある「わかれへんことをわからへんって」言えないしんどさは、保母という仕事が専門職であるがゆえに、すべてが「できる」ようになってないと、一人前の保母として認められないのではないかという不安からきているものである。もしかしたら、この言葉は、アトム共同保育所へ赴任する前の私立保育所で「保母の資格がない」ことを理由に辞めさせられた出来事も関係しているのかもしれない。アトム共同保育所における彼女の経験は、「できない」自分を責める苦しさから始まっていた。さらに、うまくいかないことがあったとしても、それを我慢するのがプロとしての仕事の仕方であると考えていた。自分で自分を苦しめる働き方をしてきた長谷川は、我慢が限界に近づき、「わかれへん」という気持ちを職員会議でぶつけてみたという。

半年ぐらいそんな毎日が続いて、しんどかって、もう辞めたいって思うことばかりやったんです。ある日の会議の時に、会議では保母さんが十数人おるんやけども、そんな中で当てられて、私は泣きながら、「私は抱っこをどんな時にしたらええかわからへん」っていうふうに、ボソって言うたんですよ。その時私の「わかれへん」に対して、否定するって言うんかな、「そんなこともわからんと仕事してたんか」っていうふうに言う保母さんは、誰一人いなかったんですよ。逆に、「そういうふうに、抱っこの方がどんなしたらええかわからへんっていう疑問って、すごい大事なことでな」っていうふうに、何年も働いている保母さんが言うてくれたりしたんですよ。私はめっちゃめっちゃびっくりして、そういうふうに「わかれへん」と言えた自分にもびっくりしたけども、それを、今まで否定されることばかりやったのが、否定せずに受けとめてくれたことに、私はすごくびっくりしました。²⁷⁾

アトム共同保育所の職員たちは、「わかれへん」といった長谷川に対して、半人前だと批判するのではなく、「わかれへん」気持ちを受け止め、「わかれへん」ということも大事なことでであると認めてくれたのである。保母資格がないことを理由に解雇され、「できない」ことを隠してきた長谷川にとって、仕事における自分の不安を初めて受け入れてもらった

ことは、どれほどの安心につながったのだろうか。本節の冒頭で確認したように、アトム共同保育所の中で、「できない」ことを認め合う職員集団が出来上がっていたことを確認することができる。その後も、「やめたい」気持ちを市原所長代理に打ち明けたりしながら、長谷川は、保母としてだけでなく、一人の人間として成長していった。

(3) 成長することでみえてきた「自分」の姿

後述するように、長谷川は、アトム共同保育所の保護者に依頼されて貝塚市立第四中学校の3年生に対して、「進路学習」の講演を行っている。その際に、自らのライフストーリーについて次のように話している。

今まで疑われることとか、頭が悪いついていうふうに否定されることとか、あんたは茶髪やから、そういうふうな人間やって見られることにずっと反抗してきたんやけども、いままで仕事に就いて、同じ気持ちになってもらった体験とか、誉められた体験っていうのは少ないんやけども、アトムで仕事して誉められたりすると「そんなことないわ」と少し疑いながら、「あ、私にもこんないいところあるんやなっ」ていうふうに、少しづつやけど思ってきました。悩んだり失敗したり落ち込んだり、またそこで頑張ろうと思ったりしながら、少しずつ自分がちょっと好きになってきたかな。自分に自信も持ってきたかなっていうふうに思います。²⁸⁾

幼いころから自分を「駄目な自分」と捉え、周囲に反抗することもあった長谷川が、アトム共同保育所で働くことにより、自分を見つめ直し自分の内面と深く向き合っていることを感じる語りである。そこには、今までの自分の反抗を認めて、変わった自分に対してポジティブな意味付けをしようとする姿勢を読み取ることができる。また、そうした成長は、新たな「自分」を発見するきっかけになっていく。

いろんな環境で育った者同士と一緒に働き続ける中で、みんな人間関係や保育のことなどいろんなことに悩み葛藤していることがわかってきました。私は職場での人間関係のなかで、葛藤や悩み、自分の思いを、少しずつだけど相手に

伝えたり、「私はこういう気持ちなんだ」「あ！こんな考え方もあるのか」と話し合えることができるようになった自分を見いだすようになりました。そしてそんな仲間がいることに気がつき、そんな私を自分で成長しているように思えるのです。何かにぶちあたったとき、落ち込んでいるときに話を真剣に聞いてくれる人がいて、言葉に表さなくてもこの私という人間について考え、そのままの私を認めてくれる仲間集団があります。そして、その中の一員である私は、自分のことだけを考えるのではなく、相手の気持ちを理解したり認めたりできる自分があります。

私は私、他人は他人というふう生きてきたなかで、相手の気持ちに立ち、相手を認めることは、すごくしんどくてなかなかできない。でも、そんな自分になりたいと思えるようになった自分がある。こんな気持ちになれたのは、周りの仲間・保護者と、助け合い、励まし合い、協力し合う仲間があるからだと思いません。²⁹⁾

長谷川は、日々の中で感じる多くの葛藤や不安を表に出さないことがプロの仕事だと考えていたが、そうした気持ちをさらけ出すことによって、自分の弱さやしんどさと向き合うようになったことを、自分の「成長」と捉えていることがわかる。さらに、「相手の気持ちに立ち、相手を認めることは、すごくしんどくてなかなかできない」と自分のできないことを素直に認めた上で、「でも、そんな自分になりたいと思えるようになった自分」まで丁寧に認めている。長谷川の手記からは、そんな自分の変化を喜んでいるようにも感じられる。「できない」自分を責め続けてきた日々を過ごしてきた彼女にとって、アトム共同保育所の職員集団がもたらした成長は、これまでの人生の中で味わったことのない経験だったに違いない。彼女の言葉からは、自分の成長が自分を支えている様子が伝わってくる。

付け加えるならば、このような職員集団が出来上がりつつあったのは、前節で確認した市原の経験が深く関わっていると思われる。「保母をやめたい」と訴えたとき、やっていることを認めてくれた同僚がいたこと、そんな同僚に支えられて10年間を過ごしてきた市原の経験が、お互いに認め合う職員集団

を形成していたのである。

第3節 保護者からみた「共同」

本節では、第2節で保育者としてのみならず、一人の人間としても成長した長谷川と関わりのあった保護者からみた「共同」に注目してみたい。

長谷川は、手記の中である一人の男の子とその保護者との関わりについて記している。長谷川が一歳児の担任になった時、Kという一歳の男子がいた。ある日、給食の後に、Kがおまるで拗ねていたところを、長谷川が見つけた。長谷川は、Kに対して給食のおかわりが欲しいのかと、献立を訪ねた。Kは、「キュウリのおかわり欲しいんか」と尋ねたときに、顔色が変わったという³⁰⁾。そんなKを見て、長谷川は、次のように感じた。

あ、Kはキュウリのおかわりが欲しかったんやなって思って、私はその時、口で何々が欲しいって言うふうに見えるようにするにはどうしたらええんやろうって、そんな時パッと思った。その日の夕方にまたカセットをかけて欲しかったみたいで、カセット掛けて欲しいって言うことが、私に、何を掛けて欲しいか、アンパンマンなんかとか、そういうことがうまく伝わらんかって、また下唇を出してすねてたんですよ。³¹⁾

長谷川は、言葉で気持ちを伝えられないKに対して、保育者としてどのように関わっていくべきなのかを考えているが、その対応の仕方は、保育者として何ら間違ったことではないだろう。しかしながら、Kの父親に、言葉で気持ちを伝えられないことを話すと、「Kも最近自己主張が激しくなってきたなあ」と言われたという³²⁾。長谷川は、この父親の言葉に、次のような疑問をもった。

自己主張っていうのは、自分を表現すること、例えば、自分を表わす、自分の思ってることを表わすことなんやけども、「自己主張が激しくなってきたのう」と言われた時に、えー？と思ったんですよ。私は、口で言えることが自分の表現やっというふうに乗ってたのに、お父さんは「激しくなってきた」っというふう言う

たんですよ。なんでかな？なんでかな？と思って、ずーとその一晚考えてて、あっそうか、言葉で言えることが自分の表現じゃなくて、そういうふうにするとか、例えば暴れたりとか、そういうことも自分を表現している一つなんやなっていうふうに乗って知ったんですよ。³³⁾

長谷川は、Kとの関わりを次の日に日報に書いた。「そんなこともわからんと仕事してんのか」と言われるかと思っていたが、Kの母親から、「そんなふうにも悩んだり考えたりやってる姿を見て、すっごううれしく思うし、私も頑張らなあかんと思って、励まされた」と返事をもらった³⁴⁾。実は、Kの母親は、長谷川の中学校時代の恩師であり、長谷川のやんちゃな時代を知っている人物であった。恩師であり、自らが担当する母親からの言葉は、長谷川の成長が周囲に認められていたことを表している。

そこで、本節では、Kの母親の手記を手がかりにして、アトム共同保育所における保育者と保護者の「共同」を、保護者の視点から読み解いてみたい。

Kの母親は、貝塚市で体育教師をしながら、3人の子どもを育てる母親だった。3人の子どもたちは、アトム共同保育所で育ており、長谷川が担当したのは3人目の子どもだった。Kの母親が手記を書いたのは、1980年代であり、日本の教育現場で荒れ、非行、校内暴力が問題となっていた時期である。体育教師には生徒指導が期待され、Kの母親も例外ではなかった。しかし、Kの母親は、子どもへの関わり方に悩んでいたという。

じゃあ15年前の私、どんなやったんかいうたらね、その荒れた子どもらに声掛けたらいいんだけれども、ただ単にね、ダメって言うだけで切り捨ててしまっていた自分があったと思うんです。切り捨てるんじゃいけないと頭では思うから、悪い子にはもちろん関わっていくんやけれども、それに対して反応のない子は、それ以上に深く行かない。もうダメやろって思って。私の方に、くっつかかってくる子には、なんやねんともういっぺんいけるから、とことんやっっていくんやけど、逃げ回る子にはそれ以上踏み込まない。³⁵⁾

「もうダメやろ」と思うと、深く関わることができなかつたのは、自らの人生観が影響していると、Kの母親は語っている。Kの母親は、高校時代、陸上でインターハイまで出場した選手だった。それは、一生懸命、努力した結果だったが、そうした結果を得ることで「やらない奴は努力しない奴、ダメな奴」という人生観がうまれた³⁶⁾。そのような姿勢で生徒に関わるため、「反応のない子」や「逃げ回る子」には深く介入できなかつたのである。

しかし、Kの母親は、アトム共同保育所に子どもを預け始めてから、その職員集団に驚いたという。すでに、本稿で指摘してきたように、アトム共同保育所では、「できない」ことを隠すのではなく、むしろ、「できない」ことを共有する空気がある。それは、保護者に対しても同様で、保護者から失敗を指摘されると、「抜けてましたか、それは大変申し訳ございませんでした、失礼しました」と謝るのではなく、「すいません、ごめんよ、でも私ダメで、未熟な人間なもんで」と伝えている³⁷⁾。そのような職員たちをみて、Kの母親は、「おかしい」「変わっている」と感じたという。Kの母親は語る。

そんな失敗話をいったことなんて、教師生活10年目の私なんかにとったら、無いんですよ。教師っていったらまず自分の世界をカムフラージュするんですよ。失敗するとき、ミスる時もありますよ。そりゃ全部認めへん訳じゃ無い、認めるときもあるんやけれど、やっぱり往々にして認めにくい。³⁸⁾

Kの母親は、中学校の教師集団に身を置いているからこそ、アトム共同保育所の不思議な空気に敏感だったのかもしれない。一人で学級をもち、「学級王国」と例えられるほど閉鎖的な教室では、教師のミスは簡単に修正できてしまう。しかし、アトム共同保育所では、あえて「できない」ことや「未熟な私」を表現する空気がある。Kの母親は、最初こそ戸惑ったというが、徐々にアトム共同保育所における「できない」ことを共有することで、親が気張らずに何でも話せる空気になっていると気づいたという。そのような中で保育者と関わっていくうちに、アトム共同保育所で「ありのままの人間でええねんな」ということを教えられたという。

だからこのアトムの中で教えられたことは、ありのままの人間でええねんなってということとなんです。それと色々な人がいろんな場面で苦しんでるし、悩みって言うのはその時なくたって突然沸いてきたりすることもあるし、気づいたら、かくさんで（引用者注：隠さないで）いいねんなってということが、当たり前のことなんやけれど、そういうことが分かったなって気がするんです。³⁹⁾

アトム共同保育所で「ありのままの人間でええねんな」ということを学んだKの母親は、自らの子どもや仕事で関わっている子どもたちとの関係性が変わってきた。これまでは、自らの中で勝手に切ってきた生徒に対しても、真摯に向き合うようになった。

人間として付き合うときに、何が大切か、だから、生徒と先生が付き合うときにも、信頼関係が大切なんやったら、私がミスしたら、相手が13歳の子どもであったって、「申し訳ない」とあやまらなあかんことだってあるだろうし、逆に生徒の方が、私がこの子のためだと思ってちゃんとやっていることなんやから、子どもが失礼なことしたら、生徒にあんたちゃんとそれは失礼なことしてるからあやまらなあかんわ、きちっと言えなアカンと思うし、子どももあやまらなあかん。そういう当たり前のことが、やっぱりできていかなあかんあ。人間が感情を出し合うんやから、ぶつかることもいっぱいあるんやけれどね、悪い生徒なんかも、いままでやったら自分は、もう逃げる生徒、こっちが当たっていても逃げる生徒はそのまま切ってしまったことがおこったんやけれど、こいつは今私とようむきあわんねんやなことが、理解できるようになった。⁴⁰⁾

Kの母親は、子どもも大人も同じ人間であり、その関係は上も下もない対等な関係であることを、アトム共同保育所で学んでいることがわかる。興味深いのは、人間関係の前提として、ミスや失敗をして、衝突もするという人間の未熟さへの気づきを明示している点である。こうした人間観は、まさにアトム共同保育所に通底しているものと同様であり、集団

お互いの未熟さを共有する文化と連続している。Kの母親にとって、アトム共同保育所で新たな文化に触れることは、教師という自らの仕事、そして人生観を変革する契機であった。

おわりに

本稿は、アトム共同保育所における大人の手記を手がかりにして、保育における「共同」の可能性を検討してきた。とりわけ、本稿で着目したのは、保育者同士、あるいは保育者と保護者における「共同」のあり方である。改めて、各節で明らかになってきたことをまとめてみよう。

第1節では、主に市原の語りを中心に、アトム共同保育所における「共同」の土壌がいかにして出来上がったのかを検討した。まず、市原がアトム共同保育所で経験したのは、自らのふるまいが同僚を支えるという「共同」のあり方だった。アトム共同保育所に就職してから、子どものために懸命に働き、結果的には、身体的にも精神的にも疲弊してしまった市原であったが、そのような彼女の姿は、ともに働く保母たちの仕事を支えていた。市原は、保護者から「研修をやめてほしい」と言われたことでうまくいってないと感じていた一方で、周りの保母たちは、自らの仕事に向き合うきっかけを市原から与えてもらったのである。また、そんな保母たちの成長を、市原は励みに変換して、自らの保育に向き合うエネルギーにしていった。このような市原の経験は、第2節で確認した長谷川の成長の土台となった。

第2節では、長谷川教子の経験を中心に、保育所の中で保母が成長することは、保育における「共同」にどのような可能性をもたらしているのかを検討した。長谷川は、できないことを隠して仕事をしてきたが、「しんどい、わからない」という気持ちを同僚たちに受け止めてもらい、自らが成長する契機を得ていた。長谷川の語りで特徴的なのは、成長した自分を認めたことで、「できない」自分とも向き合うことができるようになってきていることである。自分の成長を通して、自分自身や他の保育者を支え、またそれが自信につながり、成長を促すという循環が長谷川の中には出来上がっていた。また、長谷川の成長で必要不可欠なのは、「しんどい、わからない」という気持ちを一緒に考えてくれる同僚であ

り、周囲の助けがなければ達成し得ない。そうした保育者同士の関係性は、アトム共同保育所における「共同」の一つのあり方となっていたのではないだろうか。

第3節では、第2節で検討してきた長谷川教子が担当した子どもの母親であり、恩師でもあるKの母親の手記を中心に、保護者からみたアトム共同保育所の「共同」を明らかにした。体育教師をしていたKの母親は、アトム共同保育所の「できない」ことや未熟な自分の共有する空気に違和感をもっていた。しかし、そのような空気があるからこそ、保護者が気張らずにアトム共同保育所に関わることができることに気づき、保護者も保育者も「ありのままであえねんな」ということを教えられた。Kの母親の語りで特徴的なのは、自分の変化を、子どもの母親と教師としての自分の両面から述べていることである。アトム共同保育所の空気に触れることを通して、Kの母親は、もともと持っていた人生観が変化していくことになった。また、Kの母親と長谷川の関わりは、保育者の重要な役割の一つである保護者を支援することに対する示唆を読み取ることができる。すなわち、保護者の支援といっても、保護者に対して指導的な関わりをするのか、共感的な関わりをするのかということには大きな違いがある。長谷川をはじめとしたアトム共同保育所の職員集団とKの母親のエピソードは、保育者が、保護者を指導する立場ではなく、子どもの成長を共に見守り支えることができる共感的で対等な立場で関わることの重要性を改めて提起している。

以上をふまえて、改めて捉え直してみるならば、アトム共同保育所における「共同」には、一人ひとりを未熟な人間として捉え、「できない」ことを共有するという意味が含まれていたことを指摘することができる。第1節で検討したように、市原が勤めた最初の10年でそのような「共同」の土壌は出来上がっていたものの、その後入ってきた職員によって「共同」的な営みが深められ、保護者も引きつけられていった経緯をふまえると、「共同」という営みは、多くの人を巻き込むパワーをもつと考えられる。

また、アトム共同保育所における「共同」という営みは、近年注目されている「チーム保育」の取り組みにおいて見落としてはならない点を指摘しているとも考えられる。「チーム保育」の研究動向を整

注

理した恒川・小原によると、「チーム保育における個々の保育者に着目した研究は、保育者相互での協働や、同僚性の構築によって、力量が形成されたり、質の向上につながるといった、肯定的な内容が多く見られた」ことを指摘している⁴¹⁾。しかしながら、本稿を通して明らかになってきたように、保育者のもとより、人間は、本来的に未熟な存在である。そうであるとするならば、「チーム保育」における保育者の「できる」部分にばかり焦点が当たってしまうのは、結果として保育者自身の首を絞めることにつながるのではないだろうか。本稿を通して明らかになってきたように、「共同」という営みが「できない」ことを共有するからこそ、お互いに支えあうことができるとするならば、「チーム保育」においても、できないからこそチームになるという心構えが必要なのかもしれない。

さらに、アトム共同保育所における「共同」に一人ひとりを未熟な人間として捉え、「できない」ことを共有するという意味があったとするならば、すでに指摘してきた曾和や堀のいう「共同」に鑑みると、以下の点をアトム共同保育所における「共同」の可能性として指摘することができるだろう。すなわち、「共同」という営みは、子ども同士の分断を防ぐだけでなく、大人同士の分断をも防ぎ、大人同士の社会的な連帯も深めることができる。曾和や堀は、子どもに焦点を当てて「共同」を議論しているが、本稿を通して大人同士の「共同」にも可能性があることが示唆された。

加えて、曾和や堀のいう「共同保育」や「共生保育」は、「統合保育」への批判を前提としたものであり、それを乗り越えるための「共同保育」や「共生保育」であった。つまり、彼らのいう「共同保育」や「共生保育」には、「統合保育」に対抗するという意識が備わっている。一方で、アトム共同保育所は何かに対抗するためにつくられたわけではなかった。しかし、結果的にみれば、1990年代より加速する保育をサービスとして捉え、社会的共同を分断する方向性に対する抵抗を含む実践としても理解できるのではないだろうか。そのように捉えてみるならば、アトム共同保育所における「共同」は、保育サービスを中心とした社会的な分断や子育ての孤立化に対して一石を投じていると考えられる。

- 1) アトム共同保育園「保育園の設立趣旨と歴史」(最終閲覧日:2020年4月2日)
http://www.atomfukushikai.net/atom/atom_history.html
- 2) 1948年山口県生まれ。京都大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。1977年に和歌山大学へ着任し、1995年から同大学教育学部教授を務める。同大学生涯学習教育研究センター長、副学長等を経て2009年8月から第15代和歌山大学学長。1988年以来、アトム共同保育所に関わる。(和歌山大学「歴代学長からのメッセージ」最終閲覧日:2020年4月2日http://www.atomfukushikai.net/atom/atom_history.htmlを参照した。)
- 3) 山本健慈「大人の育ちを支えるもの—アトムにおける協同の思想と方法」アトム共同保育所『大人が育つ保育園—アトム共保は人生学校—』ひとなる書房、1997年、102頁
- 4) 同上、103頁
- 5) 曾和信一「『障害児』保育の意味をとらえ直す」曾和信一・堀正嗣・山下栄一・堀智晴『『障害児』保育の現在—共生保育をもとめて』拓殖書房、1983年、53頁
- 6) 同上、53頁
- 7) 同上、54頁
- 8) 堀智晴「保育者集団の形成と保育研究」曾和信一・堀正嗣・山下栄一・堀智晴『『障害児』保育の現在—共生保育をもとめて』拓殖書房、1983年、202頁
- 9) 同上、202頁
- 10) 同上、202頁
- 11) 市原悟子「親・保母が育ち、子が育つ・・・保育園は人生学校」アトム共同保育所『小さな保育所の「大きなお世話」・・・アトム共同保育所からの子育て支援・・・』1996年、80頁
- 12) 山本、前掲書、103頁
- 13) 保母は、現在保育士という名称になっているが、本稿では、検討する時代の名称に合わせて、保母を使用する。
- 14) 文章は、寄宿舎教育研究会全国研究集会記念講演の採録である。
- 15) 市原悟子「大人が育つ、子どもが育つ、地域が育つ」アトム共同保育所『透明はイヤ』1997年、86頁
- 16) 同上、87頁
- 17) 同上、87頁
- 18) 同上、89頁

- 19) 同上、90頁
- 20) 同上、93頁
- 21) 同上、93頁
- 22) 同上、94頁
- 23) 長谷川教子「考えない女から、悩める乙女への変身」
アトム共同保育所『大人が育つ保育園ーアトム共保は人生学校ー』1997年a、29頁
- 24) 長谷川教子「15歳、中学3年生の後輩へのメッセージ
保母生活が、私を変えた」アトム共同保育所『透明はイヤ』1997年b、60-61頁
- 25) 同上、62-63頁
- 26) 長谷川教子「考えない女から、悩める乙女への変身」
アトム共同保育所『保育園という名の人生学校』1995年、51頁
- 27) 長谷川、前掲書、1997年b、65頁
- 28) 同上、69頁
- 29) 長谷川、前掲書、1995年、52頁
- 30) 長谷川、前掲書、1997年b、66頁
- 31) 同上、66-67頁
- 32) 同上、67頁
- 33) 同上、67頁
- 34) 同上、67頁
- 35) 同上、73頁
- 36) 同上、74頁
- 37) 同上、75頁
- 38) 同上、75頁
- 39) 同上、77頁
- 40) 同上、78頁
- 41) 恒川丹・小原敏郎「保育領域におけるチーム保育の研究動向」『共立女子大学家政学部紀要』64巻、2018年、130頁